

急性呼吸不全患者が 非侵襲的陽圧換気療法の継続を断念する要因分析

国際医療福祉大学

成田看護学部

村田 洋章

非侵襲的陽圧換気療法

(Noninvasive positive pressure ventilation : NPPV)とは？

- 気管チューブを入れず、マスクを使用して換気補助を行う呼吸療法
- 急性呼吸不全患者への有効性が認められています



その為、気管挿管下の人工呼吸管理と並ぶ呼吸管理の一様式として定着しつつあります



NPPVが患者さんへもたらす利点とは？

	NPPV	気管挿管
気管チューブ	不要	必要
鎮静・鎮痛剤の使用	基本的に不要	必要
導入	比較的容易	十分な準備が必要
飲水、食事	可能	不可能
会話 (患者による言語的コミュニケーション)	可能	不可能
人工呼吸器関連肺炎	減少	—
入院費用		

NPPV失敗を示唆する要因は？

根拠が示されている要因

- 血液中の酸素状態が不十分
- NPPV導入時点で、患者さんの重症度が高い
- NPPV導入時点で、せん妄状態にある患者さん

根拠が示されていない要因 (専門家の意見として提示されているのみ)

- NPPVへの不快が継続する
- 患者さんが、非協力的である

NPPV施行患者さんへ必要とされる看護は？

- 血液中の酸素状態等の改善や安定化を目指したケア
- 不快などの継続を阻害する要因の緩和
- 「NPPVの継続意欲」の維持・向上を目指したケア
- 必要時には早期挿管(口から気管へ管を入れた管理)へ繋げる

しかし、

具体的にどのような要因、特にどのような患者さんの認識や意欲にフォーカスを当てると、NPPV継続or早期挿管へ効率よく繋げることが出来るか不明

研究の目的は？

NPPV施行患者さんが、
自ら断念することなく継続することができ、
必要時には早期挿管へ切り替えられるよう、
NPPVの継続を阻害する要因を、患者さんの認識や意欲も交えて
明らかにすると共に必要な看護支援を提案することを目的としました

研究の手順は？

インタビュー調査

NPPV中の患者さんの
体験(認識/意欲)を明示



数量的に調査
(診療録より)

患者さんの体験も含めた
要因を検証

インタビュー調査の
結果も活用!!

データ収集法・対象

1. インタビュー調査

対象：急性呼吸不全でNPPVを使用した入院中の成人患者さん

2. 診療録調査

対象：急性呼吸不全でNPPVを使用した患者さんの診療録

インタビュー調査でNPPV装着患者さんの 体験はどのようなものだった？

調査の結果をまとめると、下記の体験している
ことがわかりました

- ◆マスクに伴う不快(圧迫感・閉塞感)
- ◆呼吸が徐々に楽になる
- ◆圧や流量に伴う不快
- ◆NPPVの必要性を自覚
- ◆不快感や幻覚に伴う不眠
- ◆サポートにより不安や不快が緩和
- ◆NPPVをイメージできない戸惑い
- ◆NPPV継続のための自己の取り組み

数量的な調査から、NPPVの継続を阻害する 要因とし何が明らかになった？

NPPV継続の阻害要因			挿管への移行 要因	NPPVを途中で 断念する要因
開始～3時間	～6時間	～12時間		
血液中の酸素状態			●	●
呼吸困難感			●	
マスクに伴う不快 (圧迫感や閉塞感)				●
	不眠			●
	NPPV必要性の自覚		●	●
	せん妄			●

この研究の結果からどのような支援が考えられる？

-NPPVへの必要性の自覚を促す看護支援例-

NPPVの必要性の自覚を促す



「NPPV継続のための自己の取り組み」を促す



NPPV継続を促進できる可能性あり

必要性を促す **具体的な看護支援**として

- NPPVを外した際に少しでも呼吸困難が出たら重要性を強調する
- 人工呼吸器であるNPPVが無理であれば、より侵襲的な気管挿管へ移行する可能性があることを伝える

この研究での限界や課題は？

- 診療録に患者さんの状態、あるいは患者さんがどのように受け止めているか十分に記録されていない可能性がある
- 本研究で提示した要因は、今後、介入研究を行い有用性を検証する必要がある